

## 十、この村の方言

大昔、まだことばのなかった時代には、身振り手振りで自分の考えや思った事を知らせた。しかし身振りや手振りだけでは、十分な表現は不可能できつと思う事の半分も伝える事が出来なかっただろう。ことばを離れた私たちの生活を考えてみても、その不自由さが想像されるが現代の私達は、自由自在に日本語を使って便利な生活を続けている。

ところがよく気をつけてみると、文字で表現する時と音声で表現する時と、使うことばに大へん違いがある。文字表現には正しい標準語を使いながら、音声表現（話しことば）ではこの地方独特のことば、いわゆる方言を使っている。昔は主として方言を使って生活していたが、時代と共に交通が発達し、文化が受け入れられ、印刷術の進むにつれて、方言では意味の通じない欠点を認めて、日本中の人々が共通してわかる標準語が生まれた。だが、標準語を使用することが望ましいとわかっていながら、当地方としては至難であり効果はあげにくい。学校生活では少々つつしみつつも、社会生活、家庭生活にはびこる方言は実に偉大な力を持っている。現在祇王村の大人や子供たちが何気なく使っている方言だけでも約百六十七語程ある。くわしく調べたらもっとたくさんあるかもわからない。

一たん故郷を離れ、年たって望郷の一味を添えるものは方言であろう。この地方の風習をよく表わし情緒深い方言、かつ私たちの祖先が祇王井の流れと共に長い間使ってきたなつかしい方言を繰り出してみたいと思うが、さいわい新潮文庫で「日本現代戯曲集」岩田豊雄氏編の一編に「祇王村」という題の劇作がある。田口竹男氏の遺作で代表作の一つと言われる。この「祇王村」は方言劇の一種でこの地方の写実をよくされ、私たちの身近かなことばをよく理解することが出来る。

歴史と共に歩んできた祇王村の方言に対する愛着を持つと共に、明日の祇王村文化水準を高めるよう言語に対する知識を深め、豊かな言語生活を続けて行きたい。

\* \* \*

「祇王村」の一節（抜き書き）

宗右衛門 <sup>ままはは</sup> 継母や思たら、余計大事にかける、な、ほれが義理ち <sup>(ちゅう)</sup> ぶもんや。お前がなついて、お母はんお母はん言うてやりさへしたら、あない兎や角い <sup>(わ)</sup> はれんでも済むのや。お前の出やう一つで、あれの気分が - - いゝえな、みんなの気分が、ころっと違 <sup>(よう)</sup> て来よる。ほんまに呼んでやらなあかんで、今度目から。

稔 ……………（立上ってぼんやり外をみる）

宗右衛門 ややこしい家へ、あれも来よったもんぢやわい、ゴネ屋ば <sup>(じゃ)</sup>

日本現代戯曲集  
昭和二十六年八月十五日発行  
編者 岩田豊雄  
発行所 新潮社  
「祇王村」  
作者 田口竹男  
作者の略歴  
・昭和九年より戯曲を発表していた。その間京都府庁東京中央電話局勤務。  
・戦時中海軍に応召。  
・戦後京都で新聞記者をしていた。  
・「祇王村」は昭和十七年の作。  
昭和十七年六月雑誌「帝劇」に発表。  
・昭和二十三年六月十五日肉腫のため永眠年四十才。  
「祇王村」の内容  
・方言劇の一種  
・村の旅館を舞台にしてよく方言の写実がなされている。

・登場する人間関係から  
かもし出される雰囲気  
からみて暗いかげの  
あるものである。

登場人物  
宗右衛門 隠居  
とく 同  
利三郎 当主  
咲 利三郎の後妻  
稔 利三郎の先妻の子  
政代 利三郎の実妹  
与吉 政代の亭主  
太平 隣村畔上の男  
おりん 女中  
おなみ 同  
泊り客  
魚十と呼ぶ魚屋  
宴会の人々  
もぢりを着た客  
伴れの女  
運転手

っかし揃ってくさるところへ、気のあかん女子がたんだひとり、  
ほおり込まれよって。……

稔 (くるりと振向き) 僕なあ、京へまた下宿したいんや。(また祖父から目をそらし) こんなとこぢや、勉強なんて出来へん。

宗右衛門 ま、婆さんに訊いてみるこっちな。わしらにいふたかて、一向御利益なしぢや。しかしな、稔、婆さんかて、もうほんな、銭出すの懲り懲りや、いふかもわからへんな。

稔 出してくれなんだら……、ふん、飛び出してやるんや。

宗右衛門 なんしゃがんねン、極道め。……お前、飛び出して、まこと苦学してもやな、勉強したい、ちふ程の意気込み持ってんのか、持ってんのやったら、そら、えらいもんぢや。けど、お前の顔ようみると、あゝ、早う京で遊びたい、ちゃあんと書いてあるがな。

＊

＊

＊

宗右衛門 こら叶はん思て、逃げ出して来たんやが。……ちょっと、わしゃ、出て来るさかい……いや、法念寺さんや。もう和尚、帰ってはるやろ。……なんや気いかゝるな、先手連敗は。恨み晴らさでおくべきかや、うっふっふっ。(外へ出る)

＊

＊

＊

とく 利三さん！ようお前、ほんな無茶がいへたもんやな。あてはな、あては、ほんなの、反対やさけな。(政代らに) なあ、つるやの跡とり息子、奉公にやるなんて。

宗右衛門 お前、利三を丁稚にやったやないか。

とく このひとはあんた自分からなあ、板場はんが好きや言ふよってに、ほんで、鮎清はんはんに頼んだんやおへんかいな。え、利三さん、そやったろ。……いまはな学校出なんだら、どこへ出たかて、口利けしまへんのや。太平はんとこの二郎さんさへ、東京の大学へ行てるちふのに。あてはな、なにごとも、あれのいひなりに(しきりに咳込みながら) いひなりになってやるつもりや。

宗右衛門 お前のその猫可愛がりや、あれをあない野放図にしてしもたちふこと、お前考へてみやへんのけ？

とく なんで、なんであてが……

利三郎 お母はん、あんたも、一遍、どうどすね、京へ行て、えらい先生方に診て貰ははったら。

とく あてにはな、富山の葉が、一番性に合うてんのや。えらい先生方なんて、銭ばっかし沢山とらはるこっचार。

利三郎 ほんな。けど、銭のかゝるかゝらんをー。

＊

＊

＊

この地方の人物にしゃべらせることばとリズムの観察が歪みなく表現されることを何よりも望んだ写実的な作風である。

この作品の中から私たちの村の方言を客観的に読みとることができるのである。